【論文】

発達障害者が感じる色の好みとイメージの特徴に関する一考察
―障害者施設利用者に対する調査から―

松田　光一郎
Matsuda koichiro

自閉スペクトラム症など、発達障害者は感覚過敏である場合が少なくない。それは様々な感覚や知覚で起きると考えられており、その一つに「色」がある。本研究の目的は、発達障害者の色の好みやイメージの特徴を調査し、明らかにすることである。これまで、日本色彩研究所などが色彩感覚に関する調査を実施しているが、発達障害を対象に調査されたデータは僅少である。そこで、発達障害者が感じる色の好みや主観的なイメージを調査した結果、性差による色の好みやイメージについては、先行研究と差は見られなかったものの、発達障害者が感じる色の好みとイメージの特徴を示すことができた。

キーワード　発達障害者、色の好みとイメージ、障害者施設

Ⅰ．はじめに

わが国では、障害者が制作した作品は芸術という分野では語られてこなかった時期が存在した。しかし、その間でも障害者の芸術活動は継続し支援されてきた。戦後、日本における障害者アートの画家としては、八幡学園（知的障害者養護施設）出身の山下清（1922～1971）が有名である。彼の作品に観る色使いは、画壇・文壇から高い評価を受け、「日本のゴッホ」と称された。当時、彼が創作した美術作品の展覧会は全国各地で非常な人気を呼んだ。このブームにより、もともと日本の美術界から反感を買っていた式場は、敬遠されるようになる。そして、山下清を含めた障害者アートは美術分野としてではなく、福祉や教育の分野に位置づけられるようになった（宮地, 2013）。

現在では、障害のある人達が創造する芸術活動は、「アール・ブリュット」や「エイブル・アート」として広がりを見せている。このことから、芸術活動を通じて障害者への生きがいやリハビリテーションなどの向上に関心が向けられるようになってきたと考えられる。それでは、障害のある人達は芸術作品の制作において、色の感じ方やそのイメージに関して、定型発達の人と違った視覚認知活動を行っているのであろうか。発達障害児の色のイメージに関する研究において、田中ら（2015）は、発達障害児にはピンクに共通した嗜好傾向があることや、同配色イメージ分類内でも他色よりマイナスイメージを感じる色があり、薄紫が好まれない傾向があることを明らかにした。

色の嗜好やイメージに関する研究は、時代とともに進化してきている。相馬（1985）によると、1940年以降、研究手法に変化が見られる。以前は純色や近い色を用いた小さな色紙を使う方法が主流だったが、その後の研究では中間色や幅広い色域から選ぶ試みが増え、具体的な物体との関連性を考慮した実

験も行われるようになった。また、千々岩（1983）によれば、日本における色の好みの動向を見ると、青と白が一貫して最も好まれる色であり、暖色系よりも寒色系の色の人気が高い傾向にあるとされている。しかし、調査時期によってわずかな違いが見られ、流行や時代の背景も影響する可能性があるとされている。また、相馬（1985）は、年齢が進むと個人の色の好みに変化が現れることや、性差に関しても差異があり、男性は特定の色相に偏った好みを示すことが多く、女性は幅広い色を選択する傾向があることを示唆した。このことから、色の好みに関する研究では、調査する時期や対象により異なる見解が生まれる可能性が考えられる。

山脇（2010）は、現代日本人の色の好みの傾向について、青、緑、白、赤、黒が一般的に好まれやすい色であり、日本人の感性に深く根付いていることを示唆した。また、明るい色や鮮やかな色が好まれる傾向があり、基本色相が中間色相よりも好まれ、シンプルで鮮明な色が、好意的に受け取られ、暗い色や鈍い色、濁った色はあまり好まれないと述べている。野村（2005）によれば、成人の嗜好順位は青、赤、緑、白、ピンクであり、特に青、緑、白、赤に関しては人々の嗜好が比較的固定的である一方、他の色については個人差があることを明らかにした。

色の嗜好について、仁科（2015）は、文化や社会的背景とも関連し、特定の色が好まれやすい傾向がある一方で、個人差や文化等によっても選択が変わることを示唆した。また、色の感情的な効果や意味を解明する上で、色彩連想調査は非常に重要な手法の一つであり、被験者に特定の色から連想される雰囲気や具体的な要素、抽象的な概念などを自由に述べさせることで、色に対する個人のイメージや感情を探れることが可能になると述べている。

（**表１**）の色の連想キーワードでは、暖色系の色について肯定的なキーワードが共通して現れている。暖色系の色は多くの人に明るく温かなイメージを与えるだけではなく、共感覚も関与していることが示唆されている（仁科, 2015）。また、時代や社会的な影響も色のイメージに影響を与えていると考えられる。特定の色が特定の時代で象徴的な意味を持ち、色に関連する対象物が連想される傾向について、日本色彩研究所などが大規模調査を実施している。

以上のことから、私たちにとって色はさまざまな場面において判断材料になっているが、色のイメージは個人によって捉え方や連想される対象に違いが生じることが考えられる。たとえば、自閉スペクトラム症などの発達障害者は、感覚過敏である場合が少なくなく、さまざまな感覚や知覚で生起すると考えられており、その一つに「色」がある（藤井, 2025）。

しかしながら、発達障害のある人を対象とした色に関する研究は、澤田（1984）、向井ら（2006）、菊池ら（2009）の研究があるのみで僅少である。そこで本研究では、発達障害者が感じる色の好みやイメージの特徴について明らかにする。

（表1）　色の連想キーワード

	赤	オレンジ	黄	ピンク	茶色
具体的	血，火，りんご，イチゴ，口紅，トマト，バラ，唇，マニキュア，女の子，炎，夕日	みかん，オレンジ，太陽，夏，ひまわり，南国，夕日，柿，レンガ，ニンジン，黄身	ひまわり，レモン，バナナ，からし，光，たんぽぽ，グレープフルーツ，ひよこ，キリン	桜，桃，女の子，イチゴミルク，花，チューリップ，女性，ハート，リボン，エプロン	土，木，レンガ，チョコレート，秋，大地，おじさん，おばあさん，栗，落葉，ココア
抽象的	熱い，派手，情熱的，明るい，あざやか，強い，恐い，暖かい，きれい，女性的，愛，活動的，危険	明るい，暖かい，陽気，楽しい，元気，目立つ，派手，まぶしい，きれい，おいしそう，鮮やか，子どもぽい	派手，元気，まぶしい，すっぱい，楽しい，きれい，目立つ，うれしい，軽い，うるさい，注意，危険	やわらかい，やさしい，かわいい，ふわふわ，安心，幼い，子どもらしい，暖かい，ぬくもり，うすい，上品	落ち着いた，暖かい，暗い，にごった，汚い，大人っぽい，重い、渋い

Ⅱ．方法

１．調査協力施設および調査対象者

A障害者施設を利用している発達障害者（20歳代から50歳代）を対象に調査を実施した。A障害者施設は、「障害者総合支援法」に基づき、障害者の日常生活及び社会生活を支援するため、施設入所支援を行うとともに、施設障害福祉サービスを行う施設であった。A障害者施設は、発達障害者に対し、施設入所サービスを提供するとともに、昼間は通所による生活介護などの日中活動事業を行っていた。日中活動として、コミュニケーションが苦手な発達障害者に対し、表現の一つとして美術活動を行っていた。利用定員は入所20人、通所50人であった。

２．調査方法

A障害者施設の入所および通所利用の発達障害者に対して、2023年8月に質問紙による色彩連想調査を実施した。色彩連想調査は、被験者に特定の色から連想される雰囲気や具体的な要素、抽象的な概念などを自由に述べさせることで、色に対する個人のイメージや感情を探ることが可能だと考えられている（仁科,2015）。そこで調査項目は、性別および入所・通所別に人気色である10色（ピンク、赤、オレンジ、黄、黄緑、緑、青、紫、白、黒）の選択肢からランキング形式で結果を集計し、1位の色に10ポイント、2位の色に9ポイント、10位の色には1ポイントというように値を付与し、色のイメージから考えられる連想語につい回答を求めた。その際、対象となる色を分かりやすくするため、白板に対象となる10色を表示した。また、色に対する連想キーワードを具体・抽象別に回答を求めた。

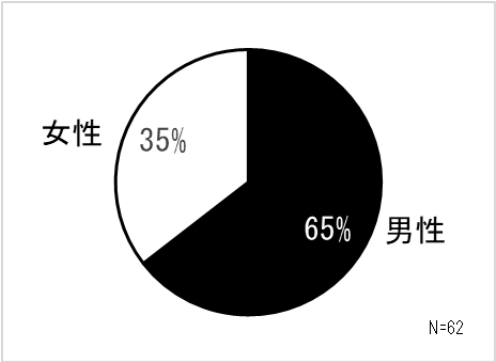
３．倫理的配慮

本研究は、筆者が所属する大学の研究倫理委員会の承認（研究倫理2023-02）を得て実施した。質問紙調査の開始にあたり、A障害者施設の管理者に研究協力依頼を行い、同意を得たうえで、調査対象者に対し、調査への協力は強制ではないこと、施設利用サービスに全く影響しないこと、不参加への不利益は一切ないこと等を文面と口頭で伝えた。また、調査内容は、研究目的以外には使用せず、情報管理に十分配慮する点を説明し、質問紙の回答の提出を以て、研究参加への同意を得られたものとした。

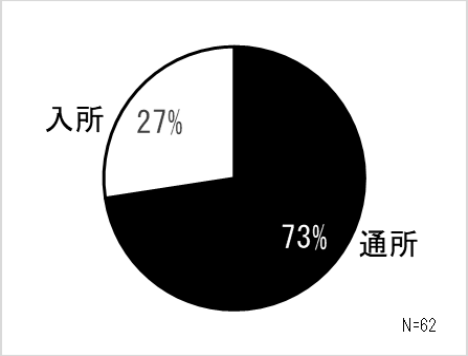
Ⅲ. 結果

１．性別および施設入所・通所別の比率

調査対象者62人のうち、性別では、男性40人（65%）、女性22人（35%）であった（図1）。施設入所・通所別では、通所45人（73%）、入所17人（27%）であった（図2）。



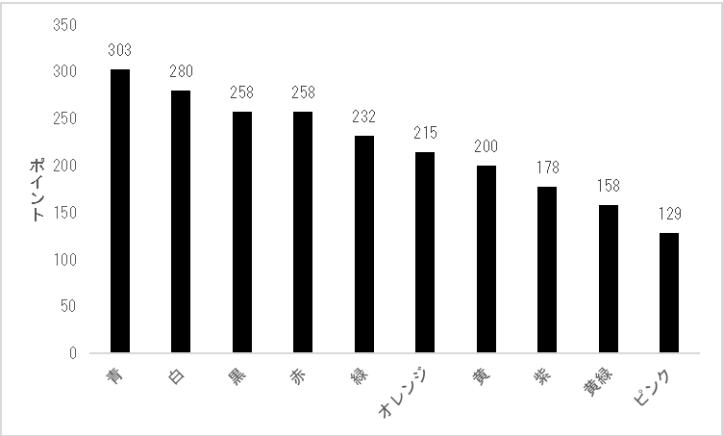
（図1）　男女の比率



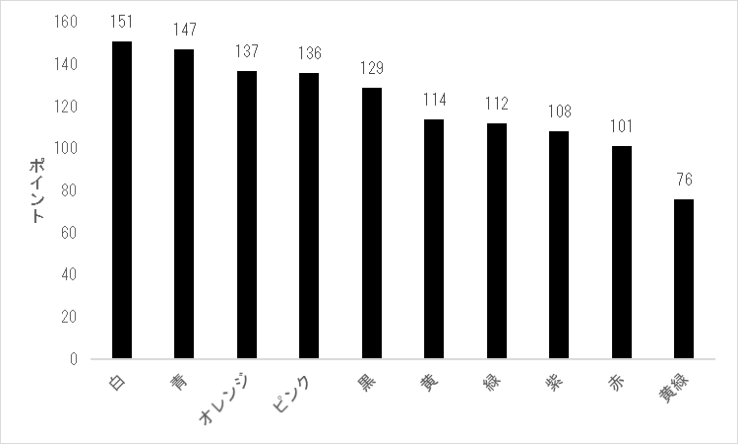
（図2）　施設入所・通所別の比率

２．性別による好きな色とポイント

男性の好きな色の1位は青で303ポイント、2位は白で280ポイント、3位は黒で258ポイント、4位は赤で251ポイント、5位は緑で232ポイント、6位はオレンジで215ポイント、7位は黄で194ポイント、8位は紫で178ポイント、9位は黄緑で158ポイント、10位はピンクで129ポイントであった（**図3**）。女性の好きな色の1位は白で151ポイント、2位は青で147ポイント、3位はオレンジで137ポイント、4位はピンクで136ポイント、5位は黒で129ポイント、6位は黄で114ポイント、7位は緑で112ポイント、8位は紫で108ポイント、9位は赤で101ポイント、10位は黄緑で76ポイントであった（**図4**）。



（図3）　男性の好きな色とポイント

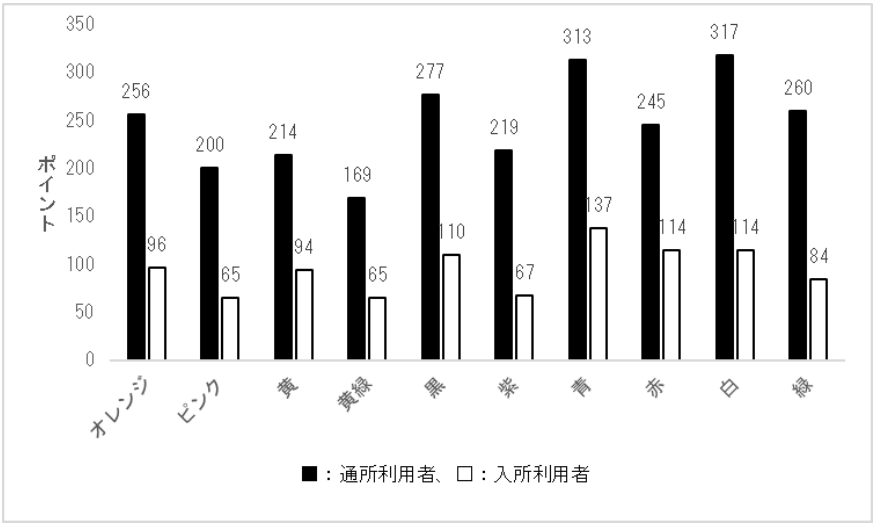


（図4）　女性の好きな色とポイント

３．施設入所・通所別の好きな色とポイント

通所利用者の好きな色の１位は、白で317ポイント、２位は青で313ポイント、３位は黒で277ポイント、４位は緑で260ポイント、５位はオレンジで256ポイント、６位は赤で245ポイント、７位は紫で219ポイント、８位は黄で219ポイント、９位はピンクで200ポイント、10位は黄緑で169ポイントであった（図5）。

次に、入所利用者の好きな色の１位は、青で205ポイント、２位は白で114ポイント、３位は赤で114ポイント、４位は黒で110ポイント、５位はオレンジで96ポイント、６位は黄で94ポイント、７位は緑で84ポイント、８位は紫で67ポイント、９位は黄緑で65ポイント、９位はピンクで65ポイントであった（図5）。



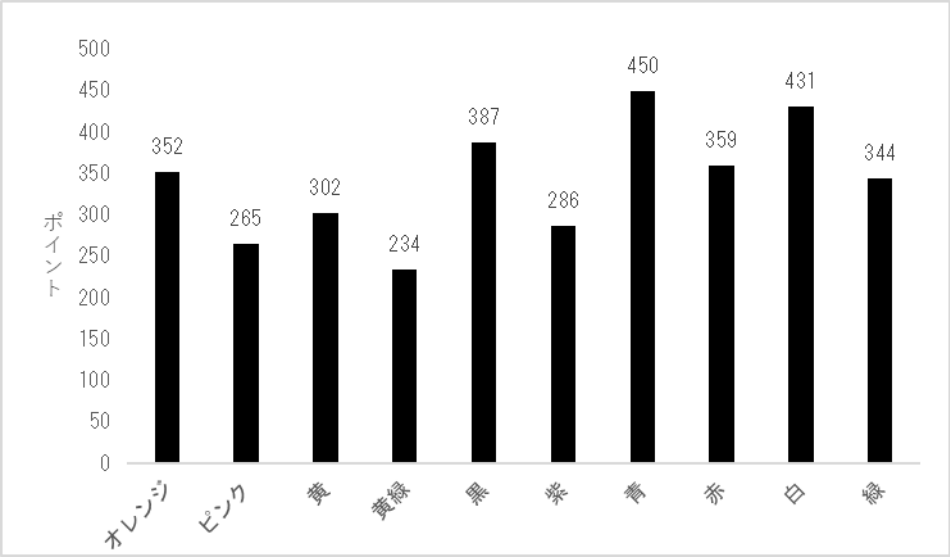
（図5）　施設入所・通所別の好きな色のポイント

４．色のイメージと連想語

好きな色の総合ポイント（図6）で、1位（450ポイント）の青のイメージは、海、空、深海、かき氷、水、夏、湖等となり、抽象的なイメージは涼しい、落ち着く、暗い、さわやか、おとなしい、寒い、フレッシュ、深い、静か、かわいい等という結果になった（表2）。2位（431ポイント）の白のイメージは、紙、雪、石材、自由、部屋、無、雲、大福、ノート、わたあめ、白Tシャツ、冬等となり、抽象的なイメージは清潔、さわやか、軽い、真っ白、ふんわり、清楚、ふつう等という結果になった（表2）。3位（387ポイント）の黒のイメージは、夜、黒塗りの車、闇、チョコ、洞窟、海苔、すみ、宇宙、ブラックホール、影、カラス、冬、大人等となり、抽象的なイメージは暗い、重い、固い、高級感、陽気、クール、裏、強い、陰気といった結果になった（表2）。4位（359ポイント）の赤のイメージは、情熱、トマト、血、炎、リンゴ、赤信号、太陽、苺、バラ、熱血、火、夏等となり、抽象的なイメージは陽気、パワフル、あつい、危ない、派手、強い、痛い、からい、うるさい等といった結果になった（表2）。5位（352ポイント）のオレンジのイメージは、みかん、太陽、秋柿等となり、抽象的なイメージはあかるい、オレンジ、元気、あたたかい、派手、中性、陽気等という結果となった（**表2**）。6位（344ポイント）の緑のイメージは、自然、葉、山、森、エメラルド、木、青葉、草、きゅうり、お茶、野菜、草原、カエル、植物、初夏等となり、抽象的なイメージはリラックス、優しい、癒し、安心、目に優しい、さわやか、穏やか、誠実、落ち着いている、さっぱり等という結果になった（**表2**）。7位（302ポイント）の黄のイメージは、注意、向日葵、檸檬、夏、バナナ、星、春等となり、抽象的なイメージは眩しい、あかるい、爽やか、元気、ポップ、派手、しっかりしている等という結果になった（**表2**）。8位（286ポイント）の紫のイメージは、毒、ぶどう、虹、ラベンダー、パンジー、あじさい、悪魔、魔女、秋等となり、抽象的なイメージは暗い、怖い、毒々しい、危ない、静か、神秘、独特、派手、不気味、おばあちゃん等という結果になった（**表2**）。9位（265ポイント）のピンクのイメージは、リップ、恋、女の子、桃、花、桜、ハート、女子、フラミンゴ等となり、抽象的なイメージは可愛い、優しい、ドキドキ、優しい、キュート等という結果になった（**表2**）。10位（234ポイント）の黄緑のイメージは、キウイ、枝豆、お茶、葉っぱ、若葉、風、スライム、カエル、抹茶、マスカット、青りんご、春等となり、抽象的なイメージはあかるい、優しい、さわやか、安心、やわらかい、新しい、不思議、自然、かわいい、おしゃれ等という結果になった（**表2**）。

（表 2）　色の連想キーワード

	青	緑	赤	白	黒
具体的	海、空、深海、かき氷、水、夏、湖	自然、葉、山、森、エメラルド、木、青葉、草、きゅうり、お茶、野菜、草原、カエル、植物、初夏	情熱、トマト、血、炎、リンゴ、赤信号、太陽、苺、バラ、熱血、火、夏	紙、雪、石材、自由、部屋、無、雲、大福、ノート、わたあめ、白Tシャツ、冬	夜、黒塗りの車、闇、チョコ、洞窟、海苔、すみ、宇宙、ブラックホール、影、カラス、冬、大人
抽象的	涼しい、落ち着く、暗い、さわやか、おとなしい、寒い、フレッシュ、深い、静か、かわいい	リラックス、優しい、癒し、安心、目に優しい、さわやか、穏やか、誠実、落ち着いている、さっぱり	陽気、パワフル、あつい、危ない、派手、強い、痛い、からい、うるさい	清潔、さわやか、軽い、真っ白、ふんわり、清楚、ふつう	暗い、重い、固い、高級感、陽気、クール、裏、強い、陰気
	オレンジ	黄	紫	黄緑	ピンク
具体的	みかん, 太陽、秋、柿	注意、向日葵、檸檬、夏、バナナ、星、春	毒、ぶどう、虹、ラベンダー、パンジー、あじさい、悪魔、魔女、秋	キウイ、枝豆、お茶、葉っぱ、若葉、風、スライム、カエル、抹茶、葉、マスカット、青りんご、春	リップ、恋、女の子、桃、花、桜、ハート、女子、フラミンゴ
抽象的	あかるい、オレンジ、元気、あたたかい、派手、中性、陽気	眩しい、あかるい、爽やか、元気、ポップ、派手、しっかりしている	暗い、怖い、毒々しい、危ない、静か、神秘、独特、派手、不気味、おばあちゃん	あかるい、優しい、さわやか、安心、やわらかい、新しい、不思議、自然、かわいい、おしゃれ	可愛い、優しい、ドキドキ、優しい、キュート



（図 6）　好きな色の総合ポイント

Ⅳ．考察

１．色から連想されるイメージ

１）青色

調査対象者にとって青は、海や空等の自然の要素と関連付けられるイメージが多く見られた（表2）。青は空や海の広がりや深さを想像させ、広がり感や解放感をもたらしていると考えられる。また、夏や湖等の季節や場所に関連付けられる具体的なイメージである（表2）。これは、青が夏の爽やかさや水辺の風景を連想させる語句である。青は夏の季節や水辺でのリラックスした雰囲気を表現するのに適していると考えられる。また、青に関連付けられる抽象的なイメージには、涼しい、落ち着く、さわやか、静か等が含まれていた。これらの印象は、青色は穏やかで落ち着いた印象を持たれていることが関係あるだろう。山脇（2010）は、青を見ることでリラックスや安定感をもたらし、安定感を提供し、ストレス軽減に寄与することを示唆している。また、暗いや寒いなどの一部の抽象的なイメージは、青が濃い色調である場合や、冷たい気候を連想させると述べている。

以上のことから、青色は自然と調和し、広がり感や安定感をもたらすことから、多くの人にとって穏やかでリラックスした色として認識されていることが考えられる。また、青が１位に挙げられる理由として、調査を行った季節が夏だったこともあり、調査協力者が涼しさや解放感を求めていたと考えられる。

２）白色

調査対象者にとって白は、紙やノート、白Ｔシャツ等の日常生活でよく見かける具体的な対象として関連づけられている（表2）。白は無彩色であるため、さまざまな用途で使用されていることがイメージに直結していると考えられる。また、雪や雲、冬等の季節や自然現象が白に関連付けられ、雪景色や雲の明るさ、冬の寒さを象徴し、これらの要素と結びつけられていると考えられる。このことから白は、視界に入る機会が多く、我々が道具で使用する色の中で一番使用頻度が高い色だと考えられる。白に関連する抽象的なイメージは、清潔、さわやか、軽い、爽やかさ、真っ白等が含まれている（表2）。白は明るく純粋な特性から、清潔で整然とした印象を持つ色として認識され、これが清楚さや控えめさと関連付けられる要因となっていると考えられる。また、白が２位に挙げられる理由として、対象を汚したくないという清潔への抑止力になっている色だと考えられることから、清潔さと管理力への欲求が白色に表れ、目標達成への意欲を象徴しているためだと考えられる。

３）黒色

調査対象者にとって黒は、夜や闇、洞窟、宇宙等は黒と関連付けられるイメージとして、暗闇や未知の領域、深遠な場所などを連想させたと考えられる（表2）。これらのイメージは、黒が暗さや神秘性を象徴されており、黒塗りの車や高級感等が連想されたことによって黒が高級で洗練された印象を持たれていることが考えられる。また、黒に関連する抽象的なイメージには、暗い、重い、固い、クール、強い、陰気等が含まれている。これらの印象は、黒が色彩的に暗さや重厚さを持つため、これらの特性を連想されていると考えられる。一方で、陽気などの印象は、黒の対照的な要素として考えられ、活気や明るさとは対照的なイメージが持たれている。

以上のことから、黒は個人の好みに依存する色であり、固まったイメージを持たないと考えられる。黒が3位に挙げられる理由として、固まったイメージが持たれていないことから推測すると、より個性を主張しやすい色だと考えられる。

4）赤色

調査対象者にとって赤は、陽気、パワフル、あつい、派手、強い、うるさい等の抽象的なイメージが関連付けられていると考えられる（**表2**）。山崎（2010）によると、赤は情熱や炎、バラ等の具体的なイメージは、赤が情熱や活力、エネルギーを象徴し、目を引く効果がある。そのため、情熱的な要素や鮮やかな対象物は、赤が関連していると考えられる。よって、トマトやリンゴ、苺等の食べ物に関連する具体的なイメージは、赤が食欲を刺激し、元気をもたらす色として認識されていると考えられる。赤の印象は活力、強度を表現する色であることが共通認識されている（山脇, 2010）。そして、危ない、痛い、からい等の印象は、赤が連想で注意を喚起し、危険や警告の色として認識されていることが考えられる（川上ら, 1979）。

以上のことから、赤信号等の注意喚起をする道具には、安全や注意を必要とする状況で、赤が使用されることが多いことが理解できる。

5）オレンジ

調査対象者にとってオレンジは、みかんや太陽、秋、柿等のイメージは自然の要素や季節との強い関連性が強いと考えられる（**表2**）。多くの柑橘類の中でもみかんがオレンジ色であることから、みかんとの連想もとても強い。また、自然界で見られる明るく温かな色であり、特に秋の季節や太陽の光を連想させる要因だと考えられる（山脇, 2010）。オレンジに関連する抽象的なイメージには、あかるい、元気、あたたかい、派手、中性、陽気等が含まれている（**表2**）。これらの印象は、オレンジが明るさ、活力、温かさを表現する色であることが考えられる。元気やポジティブなエネルギーを象徴し、明るく温かい雰囲気を伝えるため、これらの感情やイメージが関連づけられている可能性が高いと考えられる（山脇, 2010）。また、オレンジは自然や季節、食べ物等と連想付けられることから、悪いイメージを持たれにくい色だと考える。しかし、他の色と比べ連想ワードが少なかったことからオレンジ＝みかん等の一定の固定されたイメージがあると考えられる。

6）緑色

調査対象者にとって緑は、自然や葉、山、森、エメラルド、木、青葉、草、きゅうり、お茶、野菜、草原、カエル、植物、初夏等のイメージは、総括すると緑が自然環境や植物、季節と関連付けられることが考えられる（**表2**）。また、緑に関連する抽象的なイメージには、リラックス、優しい、癒し、安心、目に優しい、さわやか、穏やか、誠実、落ち着いている、さっぱり等が関連付けられる（**表2**）。これらのイメージから、緑がストレスの解消に役立つ色だと考えられる。緑は、しばしば安心感やリラックスをもたらす色とされ、目にやさしい色とされている（山脇, 2010）。

以上のことから、緑は自然との結びつきが強く、穏やかで癒しのあるイメージをもたらしていることが考えられる。日常生活の中でストレスや疲れを感じるときに、自然の景色が気分転換やリラックスをもたらすことから、緑色は健康や癒し、誠実さといったポジティブな感情を表現するのに効果的な色だ

と考えられる。

７）黄色

調査対象者にとって黄は、注意、向日葵、檸檬、夏、バナナ、星、春等のイメージは、黄がこれらの対象物や季節と強い関連性を持つと考えらえる（**表 2**）。黄は太陽の明るさや温かさ、そして新鮮な食べ物等と関連付けられており、日本文化では幸せを象徴する色として一般的に受け入れられている（山脇, 2010）。このようなキーワードから、黄は活気と元気を表す色として捉えられている可能性が高いだろう。太陽の輝きや陽光の温かさは、黄によって表現され、ポジティブな感情を喚起する役割を果たしていると考えられる。また、黄に関連する抽象的なイメージには、眩しい、あかるい、爽やか、元気、ポップ、派手、しっかりしている等が連想づけられた（**表 2**）。これらのイメージは、黄が視覚的に明るく、鮮やかであるため、人々の視線を引きつけ、ポジティブな感情や活気を引き出す色であると考えられる。

以上のことから、黄は活気ある色として認識され、ポジティブな感情を引き起こす色に適していると考えらえる。ストレス解消にあたり黄色は幸せな感情を得る方法として有用な色だと考えられる。

８）紫色

調査対象者にとって紫は、毒、ぶどう、虹、ラベンダー、パンジー、あじさい、悪魔、魔女、秋等の具体的なイメージから紫がこれらの対象物や季節と関連性を持つ色だと考えらており、自然界ではぶどうやラベンダー、あじさい等の一部の花や果物にイメージが偏っている。また、悪魔や魔女のイメージから空想上の生き物のため神秘的なイメージを持っていると考えられる（山脇, 2010）。

紫に関連する抽象的なイメージには、暗い、怖い、毒々しい、危ない、静か、神秘、独特、派手、不気味、おばあちゃん等が関連付けられており、これらのイメージからも紫が明るい色とは異なり、暗く神秘的な雰囲気を持つ色だと考えられる（**表 2**）。

以上のことから、紫は多様な具体的なイメージと抽象的なイメージを持つ色であり、自然界や文化的な要素によって異なる対象物や感情と結びつくと考えられる。紫のイメージは複雑で多面的であり、個人や文脈によって異なる解釈がされる可能性が考えられる。そのため、イメージが定まっていなく、色として認識が薄いと推測されるため、順位は下位にあたると考えられる。

９）ピンク

調査対象者にとってピンクは、リップ、恋、女の子、桃、花、桜、ハート、女子、フラミンゴ等の具体的なイメージは、ピンクは伝統的に女性や女性らしい要素と結びつけられ、恋愛や可愛らしさ、花や桜の優美さとも関連づけられている（山脇, 2010）。また、ピンクに関連する抽象的なイメージには、可愛い、優しい、ドキドキ、優しい、キュート等が関連付けられている。これらのイメージは、ピンクはポジティブなイメージとしてとらえられており、柔らかで可愛らしさや優しさを象徴する色であることが考えられる。ピンクは、多くの言葉でポジティブな感情や女性らしい要素を表現するのに適した色であることが考えられる。しかし、男性のポイントが少なく、下位の順位となったと考察される。

１０）黄緑

調査対象者にとって黄緑は、キウイ、枝豆、お茶、葉っぱ、若葉、風、カエル、抹茶、マスカット、

青りんご、春等のイメージは、黄緑が新鮮なイメージを持ち、植物や季節の変化と関連付けられており、自然界に関する対象が多く、食事として活用するものがある（**表2**）。また、黄緑に関連する抽象的なイメージには、あかるい、優しい、さわやか、安心、やわらかい、新しい、不思議、自然、かわいい、おしゃれ等が関連づけられており、黄緑が明るく、柔らかい色調であり、自然や新しさ、やわらかさを象徴する色と考えられる（山脇, 2010）。

以上のことから、黄緑は新鮮さ、自然、安心感、優しさを表現する魅力的な色だと考えられる。多くの具体的な対象物や季節と関連付けられ、その明るく柔らかいイメージから新しさとリフレッシュ感を連想させているが、色の好みとは別問題となり、男女ともに最下位のポイントとなったと考えられる。

２．男女別の好きな色とイメージ

A障害者施設の男性の好きな色の順位（**図3**）では、山脇（2010）の現代日本人の色の好みの傾向（青、緑、白、赤、黒）と一致していることがわかった。そのことから、A障害者施設の発達障害がある男性において、色の好みに差はないと考えられる。一方、A障害者施設の女性の好きな色の順位（**図4**）では、男性では下位であったオレンジとピンクが女性では上位であった。これについても、中村ら（2011）の抽象的色嗜好と具体的色嗜好の関係に関する研究を裏付ける結果となり、男女で色の好みの傾向に差が見られた。

島田（2001）は、幼児の色彩感情について、言葉によってイメージと結びつきやすい色と結びつきにくい色があることに加え、好きな色の傾向は男児では藍色と濃柴、女児ではピンクに集中することを報告している。また、田中ら（2015）の発達障害児の色のイメージに関する研究においても、ピンクは嗜好傾向があることを示唆している。このことは、淡く明るい色は一般的に好まれる傾向にあるとする山脇（2010）の研究を裏付けており、発達障害のある女性においても、淡く明るい色は好まれる傾向があると考えられる。

３．施設入所・通所別の好きな色とイメージ

施設入所・通所別の好きな色のポイント（**図5**）では、赤は入所利用者の好きな色の3位であるのに対し、通所利用者では6位であった。また、好きな色の総合ポイント（**図6**）でも、赤は青、白、黒に続いて4位であった。発達障害児の色彩感覚に関して澤田（1984）は、自閉スペクトラム症児の色彩使用順位は、赤、青、黄であり、その色彩使用は「黒と赤」、「青と赤」の配色に特徴が見られると報告している。赤はインパクトのある色であり、前向きな印象をもたらし、赤を取り入れることによって、元気ややる気が芽生えたり、気分を高揚させたりするなど、イメージによる効果があるとされている。反対に、怒り、危険、イライラ、殺意をイメージさせる色でもある。本調査の結果から、利用人数の違いはあるものの、施設入所・通所別で色の好みに違いが見られた。特に、通所利用者の色の好みの傾向として、赤を好まない何らかの要因が考えられる。

Ⅴ．おわりに

本研究では、発達障害者が感じる色の好みやイメージの特徴について明らかにするため、A 障害者施設を利用している発達障害者に対して質問紙調査を実施した。その結果、男女の色の好みの傾向は、山脇（2010）の研究結果と大差はなく、施設入所・通所別でも赤を除いて差は見られなかった。しかし、発達障害者は健常者に比して色により判断することが多く、形態よりも色に対して反応しやすい可能性があることが報告されている（菊池ら,2009）。これらの研究を踏まえ、発達障害者の持つ感覚などの個別差を考慮した支援を実施することが考えられる。

本研究の意義として、限定的であるが A 障害者施設を利用する発達障害者が感じる色の好みとイメージの特徴を示したことが挙げられる。一方、本研究の限界として、A 障害者施設を利用する発達障害者のみを対象とした調査であること、色の好みやイメージという主観的な調査であるため、客観的な実証研究が行われていないこと等が挙げられる。今後の課題として、色の好みやイメージが発達障害者の日常生活に与えている影響について明らかにするなど、さらなる調査を進めたいと考えている。

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご理解とご協力を頂きました A 障害者施設並び関係者の皆様に、この場をかりて心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

・千々岩英彰（1983）『色彩学』福村出版.
・藤井七瀬（2025）「ASD を含む感覚過敏・鈍麻を抱える子どもへの理解と支援に関する一考察：幼児期に・着目して」『桜花学園大学保育学部研究紀要』31, 45-53.
・菊池哲平・原田恵梨子（2009）「自閉症幼児における色と形に対する認知特性」『熊本大学教育学部紀要人文科学』58, 175-181.
・宮地麻梨子（2014）「日本におけるアール・ブリュットの展開：脱境界の芸術と福祉の実践」『生涯発達研究』6, 17-25.
・向井敦子・深谷澄男（2006）「自閉症児に対する色・形次元の表象化を促進する心理学的工作」『日本教育心理学会総会発表論文集』48, 44.
・中村信次・高橋晋也・羽成隆司（2011）「具体的事物に対する色嗜好表出：抽象的色嗜好と具体的色嗜好の関係」『日本福祉大学子ども発達学論集』3, 81-89.
・仁科恭徳（2015）「若者世代の色彩感覚に関する実態調査」『カルチュール:明治学院大学教養教育センター紀要』9(1), 55-62.
・長内清春・川端康弘（2020）「情景の印象に及ぼす色彩の効果」『北海道心理学研究』42, 27.
・澤田武（1984）「発達障害児の描画における色彩使用の傾向」『北海道大学情緒障害教育研究紀要』3, 47-50.
・島田由紀子（2001）「幼児の色彩感情」『美術教育学：美術科教育学会誌」22, 95-104.

・相馬一郎（1985）「色彩の心理効果」『色材協会誌』58(9), 548-557.
・田中直人・岩田三千子・彦坂渉（2015）「発達障害児の色イメージに関する研究」『福祉のまちづくり研究』17(1), 1-12.
・山脇恵子（2010）『色彩心理のすべてがわかる本』東京：ナツメ社.